



Title	<書評> Leo Bersani and Adam Phillips, "Intimacies", The University of Chicago Press, 2008
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 95-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Leo Bersani and Adam Phillips
Intimacies
The University of Chicago Press, 2008

宮澤 由歌

はじめに

公的空間と私的空間の区別は、我々にとってなじみ深いものである。近年女性学などによって、公的空間における性別の偏りを是正する動きが見られる。一方、私的空間における親密性は現在も明らかにされていないと言えない。たとえば、男女の恋愛関係に関すること、セックスに関することなどは、人々が明瞭な知を共有しているとは思われない。

Intimacies（『親密性』）は、私的空間と呼ばれる場所に秘められてきた領域・個人間の親密性について論じた本である。フロイト思想の研究者として名高いフランス文学者のレオ・ベルサーニと、精神分析家アダム・フィリップスの共著作である。二人は古くからの知り合いで、本書についてのやりとりは一部、二十年前からはじめられている。本書は精神分析的知見を基盤にして議論が進められている。

本書は全四章と結論から成り立っている。はじめの三章はベルサーニが担当する。第一章は、パトリス・ルコントの『親密すぎる打ち明け話』とヘンリー・ジェイムスの『ジャングルのけもの』の分析を通して、精神分析的セクションにおける親密性の特徴を抽出する作業が行われている。第二章は、ベア・バッキングと呼ばれる男性同性愛者の性行動とキリスト教神秘主義の「純粋な愛」概念を題材に、その関係性のモデルを記述する。「悪の力と愛の力」と題された第三章では、殺人犯やイラク戦争の暴力性から、人間が遠ざけながらも捨てきれずにいる悪の力と、それに相反する愛の力について考察を行っている。

これら三章は、それぞれ異なる題材を扱っているが、親密性概念に貫かれた一考察として提示される。最も注目すべき点は、「非人格的ナル

シズム」と名付けられた新たな概念が提示されることである。それは、長年にわたってベルサーニが思索してきた人間の関係性に対する倫理的な提示概念として位置している。

第四章は、フィリップスによる、ベルサーニが論じた第三章への応答である。彼は、ベルサーニの考察に対し解説と批判を行っている。そして本書の最後には、ベルサーニがフィリップスの見解に返答する形で結論が書かれている。

本稿は、主にベルサーニの論考において示された愛情関係が三つに区分されることに注目する。「非人格的ナルシズム」は最後の概念として登場する。ここではプラトンの『パイドロス』が参照され、その解釈が概念の生成に大きく寄与している。まずは「非人格的ナルシズム」の背景としてそれ以前に示された二つの愛情関係を紹介する。

Impersonality——合一とマゾヒズム

第二章において、ベルサーニは、ゲイ男性のコンドームを使わない肛門性交という意味の「ペアバック」を、キエティスムにおける一つの愛情関係を参照して考察している。ベルサーニは、同性愛者の性行為とキリスト教という両者を意図的に繋ぎ合わせ、一つ目の愛情関係として提示する。

ペアバックは、一般的に、性行為によるHIVウイルス感染と死のリスクが高まる危険な性行為として認知されるものである。一方のキエティスムは静寂主義と翻訳され、狭義には十七世紀後半から十八世紀初めにかけて、スペイン、イタリア、フランスなどのカトリック圏で流行

した神秘主義的教説である。哲学的考察として、フェヌロンの「純粋な愛についての考察¹⁾」があり、ここでは「純粋な愛」概念が示されている。それは自己貶下することで完全な受動的存在になることにより、神との合一を目指す態度を導く。

「フェヌロンやその助言者であるギュイヨン夫人にとって、純粋な愛は、自分自身に対する聖なる憎悪と神の意志に対する完全な受動性、それから自身の完全な喪失、すなわち完全な自己剥奪を要求するものである。(中略) 自己剥奪は神との合一の条件である。自己の全てを神に捧げる者だけが、神の計り知れない恣意性によるご加護の完全なる受容器になることができる。」²⁾

ベルサーニは、キエティスムの「純粋な愛」を参照しペアバックを解釈する。ペアバックを行う人々は、自らの生命を危険にさらしながらHIVウイルスの伝染を媒介する役割を担い、ウイルスは世代を超えて生き延びるという解釈である。その態度はフロイトの一次的マゾヒズムに類似している。個体的存在を神やウイルスといったより高度な次元に回収させる目的で自己貶下を行い、結果的に自己を抹消させるような愛情関係である。

ベルサーニは、以上のように、ペアバックと「純粋な愛」概念の類似点として自我剥奪的愛情関係を挙げている。その上で、両者の差異としてあるペアバックの可能性を強調する。ここではベルサーニの政治性に関する意図を見いだすことができ、それは以下のようなものである。

「(ベアバックをする人たちは)、自我に駆動される親密関係の多様な形式に対し、暗黙のうちに批判を行っているのだ。〔多様な形式とは〕ささいな性的くだらなさからはじまって(ベアバックのビデオは他のゲイポルノと違って、単につまらない身体を映し出す)、家族の排他性に至り(この排他性とは)再生産を行う親密性の社会的に望ましいものとされた閉じたユニットとしての家族である)、さらには同時に、暴力的で攻撃的で自らに閉じてしまうような種的、国民国家的、エスニックかつジェンダー化したアイデンティティにおける自我の肥大にまで至るものである。」^三

この引用部では、「自我に駆動される親密関係」に対する批判として自己貶下するマゾヒズム的セクシュアリティが存在するという主張がされている。川崎惣^二が示すように、ベルサーニがこれまでにセクシュアリティに対するマゾヒズムの重要性を述べてきた事象と関連していると言える。

後述のように、ベルサーニの思想において、サディズムとマゾヒズムは欲動という一元的源泉を持っている。その欲動が顕在する仕方は、自我が自我自身をどのように操縦するかに依存していると言えるのである。

narcissism——愛の対象の自他不可分性

ベルサーニは、フロイトのサディズムとマゾヒズムの二元論を欲動一

元論に解消することにより「自我に駆動される親密関係」を説明する。精神分析における自我研究は、A フロイトや、E コフートの精神分析的自己心理学、S フロイトからM クラインに至る対象関係論の系譜などがあるが、ここでは第二の愛情関係を示唆するものとして、フロイトが取り上げられている。

フロイトの「ナルシズム入門」^四では、自己愛と対象愛の区別の難解さが明らかにされる。フロイトはこの文章中に、選択される対象の条件として(1)自身の幼児期に失われたナルシズムを持つ者(2)母親代わりの世話をしてくれる者を挙げた。ベルサーニはそれを手がかりに、フロイトの愛の対象選択について以下のように説明する。

「対象へ投影された「素晴らしさ」は、愛する者自身の素晴らしさであり、彼の自我が失った理想への到達なのである。(中略)愛される者はそれが自身とまったく関係ないような二つの愛の対象に同一視される存在を求められるという負担を得る。彼の母親としての役割と、彼自身の理想化された幼児期の自我という二つの愛の対象に。」^五

我々は、あたかも自明なことであるかのように、「対象としての彼自身を愛する」と言う。しかし、ベルサーニによると、ラカンは1972年から73年に行われたセミナーで「愛は…誰をも彼自身の外側に行かせることはない」と語る。ラカンは「問題はいかにして他人を愛せるかである」と語るとき、ベルサーニはそれが含意したものを強調する。す

なわちベルサーニは、ラカンが我々が「愛する」行為において自分以外の「他者」へと接触することの不可能性を指摘したのだと解釈する。

フロイトとラカンは、愛を脱神秘主義的に再構築した。我々がすでに見たように、愛情関係にある人には「愛を通して私は私以外の外部と接触する、そして合一する」という神秘的な信念が前提されていると言える。しかし、ベルサーニのラカン解釈に示唆されるように、愛によって自身を超え出ることが不可能であるとすれば、我々は「世界には私以外に愛すべき（もしくは憎むべき）他者が存在する」という信念に対して絶望的な「他者なき愛」をどのように扱い得るのだろうか。

ベルサーニの葛藤はここに露見する。我々はすでに「被る」という契機を通じて、世界に他者が存在することを前提として生きている。それについてどのように思考すればよいのかという葛藤である。そして考え続けるだけでなく、この瞬間も幸福でない「被り」を受ける、論証されていないが存在する他者に対していかなる倫理が可能だろうか。この問いに対し、ベルサーニは「非人格的ナルシズム」を提示している。

impersonal narcissism——自他共有性としての「欲望」

ここまで、重要な示唆を含みながらも批判可能性を持つふたつの愛情関係を追ってきた。また「非人格的ナルシズム」が要請される倫理性も浮かび上がってきた。最後に「非人格的ナルシズム」とはどのような特徴を持つ概念であるのだろうか。

「非人格的ナルシズム」を提示するにあたり、ベルサーニは再度二元論の解体を目指している。具体的には、自己愛が対象愛となるような

領域が存在すると主張する。一方で、愛の対象を自己に全回収する完全なナルシズムに陥ることなく、他方で、自己の全てを外部に回収されるのでもない愛情関係は、「二人についての秘密であり、「他性」についての実存性である」¹¹」ものを共有することによって育まれる。共有されるものは、愛する主体の内部と主体の外に在る「他者」の内部において、両者が持つ同質的な「潜在的欲望」である。

『バイドロス』では、ソクラテスが、愛情が生じる場面について以下のように語る。主体が愛される対象の内に見ているものは、主体が生まれる前に神といたときに見た美しさのかけらである¹²。このプラトンによる愛情解釈は一般的に「プラトニック・ラブ」と呼ばれるもので、ベルサーニは精神分析的に「プラトニック・ラブ」の再解釈を行っている。それによれば、「人間が生まれる前、神と共にあったときの美しさ」とは、主体が自分自身として覚えのある、他性にも共通する実存性である。それは他人の中で反射された自己として現れる。それは私であり他人であるところの同質性であるが、神から与えられた前世の記憶なのではなく、精神分析の文脈であえて名付けるとすれば「欲望」であると結論づけられる。

「我々が念頭に置いているようなソクラテスが記述する愛情は、我々の個人の自我の日常的な発露に対する、我々の潜在的な存在¹³の心理的な先行性として再定式化されるものである。潜在的な存在は、明晰かつ判明なアイデンティティとしてマッピングすることはできない。より自分らしくなりつつあるというだけなのである。」¹⁴

ベルサーニの再解釈によれば、ソクラテスが語る愛情関係にある人々
の間の認識は、心理的特性や人格的なアイデンティティについてではな
く、普遍的で単一的な存在について行われる。その普遍的で単一的な
存在を「フィリップスは精神分析用語を用いて「欲望」と名付けるが、
ベルサーニは、「欲望」に駆動された自我が織りなす関係性が『パイド
ロス』において愛と規定されていると説明する。欲望は攻撃性としても
愛としても顕在化し得る潜在的なものである。「非人格的ナルシズム」
として彼が提示しようとしたのは、攻撃性としてではなく愛情として欲
望が発露する条件であると言える。

愛情の発露環境についてベルサーニが提示するのは、彼が「家族経
験」と名付ける場である。国家や民族、人種、ジェンダーのアイデンティ
ティに境界づけられることなく何かに所属するというベルサーニ的「家族経
験」は、*HOMOS*で語られた「脅威的でない同質性の補充²⁾」を可能に
する場として重要視されるべく提示されている。

おわりに

本書の中心概念として述べられた「非人格的ナルシズム」概念は、
我々が普段アイデンティティと呼ぶものが持つ排除性や、近代的主体の
愛情関係を正当化することで生じる否定的な「被り」の経験を回避しよ
うとする倫理的提言であると言える。この「非人格的ナルシズム」概
念の独自性は、証明されないが存在すると感じられる他者を前提として
認めることから出発する点にある。

また、この本が、ある具体個別的な政治要請に基づいて記されている

ことは明らかであろう。ベルサーニはこれまでの著作においても、具体
個性性を重視してきた。今回扱われた素材も、一貫して近代的主体同士
の愛情関係に対する批判理論のために取り扱われていると言える。たと
えば、生殖性に関する思索や、暴力を批判する側面から生まれた倫理的
考察について、本書はいかに返答しうるだろうか？

また、定義を行った途端にそれ自身が排除性を持つ概念として成立す
るというジレンマを、ベルサーニは完全に払拭しきれていない。本書の
論法が意識的にされた戦略であると推測した上で、指摘すべき点とは、
セクシュアル・マイノリティの性関係を含む愛情関係を、プラトニック・
ラブとアナロジカルに説明するという方法が、皮肉的にも、境界づけに
対する精一杯の抵抗として現れていることである。それを自覚した上で、
フロイトの文章のずれに浮かび上がる無意識を読み取り、その上に現れ
た過去の歴史における戦略を掬いあげる作業は、批判理論の手法として
「バトラーの研究などと共鳴している。倫理的意図を持つ批判理論を共
有するために、我々が彼の手法に普遍性を見いだすことは今後の課題と
するが、有意義であるに違いない。

註

一 『キリスト教神秘主義著作集第十五巻』、鶴岡賀雄ほか訳、教文館、1990、
pp.437-473

二 同、p.52

三 *ibid.*, p.55

四 「レオ・ベルサーニのセクシュアリティ論——マゾヒズムとしてのセクシ

アリティ」、川崎惣一、『城西大学環太平洋女性学研究会会報 Rm』、8(12)、
pp.42-54、2006

v Zur Einführung des Narzissmus, Jb. Psychoan., 6, 1-24, 1941(「ナルシシズム入
門」、中山元訳、『エロス論集』、1997)

vi IT, p.73

vii IT, p.84

viii 『バイドロス』ソクラテス著、藤沢令夫訳、岩波文庫、1967(322B-253C)、邦
訳 pp.73-76)

ix 引用内の太字は原文強調を意味する。

x IT, p.86

xi HM, p.7